

温故知新 北海道大学
挑戦の140年
 SCENE-1
1876-1877
 “Be Ambitious”



1. 札幌農学校周辺 (1879年 附属図書館蔵)
2. 開校式当日の札幌農学校 (1876年 附属図書館蔵)
3. W.S.クラーク (附属図書館蔵)
4. 卒業時の第一期生 (1880年 附属図書館蔵)
5. 模範家畜房などの農場施設 (1877年 附属図書館蔵)
6. クラーク離任時の札幌における記念撮影 (1876年 附属図書館蔵)
7. クラークが第一期生に与えた聖書 (大学文書館蔵)
8. クラーク講義「植物生理学」を記録した
佐藤昌介の受講ノート (大学文書館蔵)
9. 安東幾三郎による初のクラーク伝を連載した
校友会誌『蕙林』 (大学文書館蔵)
10. クラーク別離の地、島松に建つ記念碑 (1956年 附属図書館蔵)
一杉野目晴貞学長と、クラーク令孫W.S.クラーク2世ご夫妻—

Hokkaido University
HISTORY
 1876-1877

1876 —明治9年—	3月3日	クラークと雇用契約
	6月29日	クラークほか3名の 外国人教師が来日
	7月5日	クラークらが東京英語 学校等で入学試験実施
	7月31日	東京からの入学生11名 がクラークらと共に札幌 到着
	8月5日	札幌学校生徒に対し 入学試験実施
	8月14日	札幌農学校開校、第一 期生24名入学
	8月17日	授業開始、クラークは 英語・植物学を担当
	9月13日	クラークの提案で農場 を設置
	11月	聖書講読の集会を開始
	11月28日	禁酒禁煙の誓約を結ぶ
1877 —明治10年—	1月30日	手稲山雪中登山、 クラークゴケ採集
	3月5日	「イエスを信ずる者の 契約」署名
	4月16日	クラーク離任、第一期 生が島松まで見送る

大学文書館 だいがくぶんしょかん Hokkaido University Archives
 北海道大学に関する歴史的な資料を収集・整理・保存して利用に供するとともに、北海道大学史に関する調査・研究を行っている。

「クラークは」閑があれば一緒に山でも川でも出掛けて、その間に感化を及ぼして行く。単に講義をするだけが先生の役目でなく、人物に接して親しく感化を及ぼすといふのが先生の教育

— 農学をやつて実地に農場の経営もやり、作物の栽培もやる。併しながら同時に文学をやつて思想を練らう、経済をやつて国家の経済を計り、歴史をやつて永世の人物に接し、その人格に憧憬を以て自分の人格を練るといふ人格教育が我々を鍛へて呉れた。

クラークが札幌農学校で示した教育方針と姿勢は、実に目新しいものであった。第一期生の佐藤昌介は次のように回想している。

「教育を受けるあらゆる学生の胸中に、高邁な

野心(Lofty Ambition)を呼び覚まさずには置かないだろう。」

開校式演説で掲げた“Lofty Ambition”や、札幌農学校でクラークが果たした役割、彼の教え子たちへの接し方を考え合わせると、クラークが、教え子たちと身近に接するなかで折に触れ、“ambitious”ないし“ambition”の語を用いて語り掛けていたと考えるてもあながち的外れではないだろう。“Be Ambitious”は、クラークが、教え子たちに与えた濃厚な感化のエッセンスを端的に私たちに伝えてくれる言辞であり、八カ月の短期間に札幌農学校に刻み込んだ鮮烈な印象の証跡である。

「Be Ambitious”とは

開校式演説で掲げた“Lofty Ambition”や、札幌農学校でクラークが果たした役割、彼の教え子たちへの接し方を考え合わせると、クラークが、教え子たちと身近に接するなかで折に触れ、“ambitious”ないし“ambition”の語を用いて語り掛けていたと考えるてもあながち的外れではないだろう。“Be Ambitious”は、クラークが、教え子たちに与えた濃厚な感化のエッセンスを端的に私たちに伝えてくれる言辞であり、八カ月の短期間に札幌農学校に刻み込んだ鮮烈な印象の証跡である。

クラーク、別離の辞
 “Be Ambitious”

— 彼「クラーク」悠々として再び馬に跨り、学生を顧みて叫んで曰く、「小供等よ、此老人の如く大望にあれ (Boys, be ambitious like this old man.)」と一鞭を加へ塵埃を蹴て去りぬ。

一八七七年四月十六日、北海道大学の前身である札幌農学校教頭を離任するW.S.クラークを、教え子の第一期生が島松まで見送った。引用は、その別離の場面を最初に描写した、札幌農学校予科生である安東幾三郎「ウイリヤム、クラーク」(『蕙林』第十三号、一八九四年)の一節である。少々芝居掛かっており、“ambitious”ではなく“ambitions”であったり、“like this old man”の一節が続いていたりする。“Be Ambitious”エピソードの原初形である。このエピソードについては、クラークが実際にこの言葉を発したか、後に続く言葉があったか、野心・野望といった否定的な含意のある“ambitions”の語を用いた真意など、現在も議論が絶えない。

開校式でのクラークの演説、
 “Lofty Ambition”

冒頭の別離の場面から遡ること

野性(Lofty Ambition)を呼び覚まさずには置かないだろう。」

八カ月前、一八七六年八月十四日、札幌農学校開校式で、教頭に就任したクラークは演説を行い、日本が近代化への道を歩み始めたことに触れ、“Lofty Ambition”という語を用いて入学生たちに次のように呼び掛けた。

— 長年、東洋に暗雲のように立ち籠めていた階級制度と因習の圧制からの、この素晴らしい解放は、教育を受けるあらゆる学生の胸中に、高邁な野心 (Lofty Ambition) を呼び覚まさずには置かないだろう。若い紳士諸君、諸君の故国は最も誠実で有用な諸君の力を強く必要としている。諸君は、労働と信頼とそれに伴う榮譽において、最高の地位を得る覚悟をするよう努力しなさい。

都市建設から十年足らず、人口数千人の札幌に、最新の西洋科学を外国人が教授する高等教育機関を設置すること自体が野心的な試みであった。その先頭に立ち、札幌農学校の教育体制を創起する任を引き受けたクラークを突き動かしたのも“Lofty Ambition”であった。そして、クラークは、入学生たちにもまた、若者らしい向日性と向上心に満ちた挑戦を促したのである。